

---

# 沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

明智 ひな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

### 【NNコード】

N4081Z

### 【作者名】

明智 ひな

### 【あらすじ】

東京都内某所にある、古びたオフィスビル。

そこに暮らす青年“沢内啓輔”と、その娘“優”の元へ、一人の女子高生が訪れる。

彼女を苦しめる輩を、啓輔は突きとめる事ができるのか！？

はじめまして、明智ひなと申します^\_^お暇なときにも、覗いていただけ幸いです

## 第一話

都内某所。古びたオフィスビルが立ち並ぶ一角に、彼は居る。

それは、一見普通の個人経営会社。精々数名の社員が働く、小さな会社だ。

ゆえに、此処を訪れる誰もが、最初に疑問を抱くといつ。

「これは本当に、数々の難事件を解き明かしたといつ、沢内探偵のいる事務所なのか？」と。

狭い事務所のドアを潜ると、いつものように、強い煙草の匂いが鼻をつく。

長年迺（なが）していても、どうしても慣れないその空氣に、優は顔をしかめた。

出入り口に繋がる応接室におり、悪臭の原因となっているのは、二十代中頃の青年。

室内の割合を大きく占める、ゆったりとした長椅子に腰かけながら、紫煙（しづえん）をくゆらせている。

「もうひ……。パパ、また煙草？ 事務所が臭くなつちやつよ？」

「ん、ああ、優か。おかえり」

「おかえり、じゃないでしょー。」

青年　此処の事務所の主である沢内啓輔さわうちけいすけは、愛娘の姿を認める  
と、まだ長いままであつた煙草を、無造作に灰皿に押し付ける。

そうしてにこっと微笑むが、優に冷やかな視線を返されるだけで  
あつた。

「冷たいなあ……ほら、早く手洗つてこい。今日のおやつはシュー  
クリームだぞ」

「本当! ? パパグッジョブ! ナイス! 」

おやつの事を示唆しづくされると、途端に優の顔がぱあっと明るくなる。

しかもシュークリームは少女の大好物なのだ。

優は慌てて手を洗いに、ぱたぱたと奥の部屋へと向かう。

そんな少女を田に追いながら、啓輔はやれやれと肩を竦すくめるのだと  
つた。

啓輔のたつた一人の愛娘である少女、優は、今年小学校にあがつ  
たばかりの一年生だ。

そのくせ、探偵の娘であるといつ事に誇りを持っているのか、父  
親の真似事をして、推理小説やら、六法全書なんかを読み漁つてい

る。

テレビを付ければ、ニコースチャンネルや、渋い刑事ドラマなんかばかり見ている。

……とまあ、一般的な少女達と比べると、少々変わった趣味を持つた六歳児なのであった。

「パパ～！ 手、洗つてきたよー！」

ぱたぱたと優が駆け戻つてくる。余程楽しみなのだから、田がきらきらと輝いている。

「うひうひは、まだまだ子供なのだった。

「はいはい。それじゃ、ここで大人しく待つよ！」

先程との温度差に苦笑しながら、啓輔は長椅子から立ちあがるのだった。

やがて啓輔の持つてきた包みは、銀座でも有名な店舗の物。

普段の食卓には絶対出て来ないような高級品で、優は田を丸くした。

そして、いつもより若干上擦った声で問いかける。

「……、これって、洋菓子アリマの銀座本店限定高級シュークリーム

だよね！？ ビーブしたの、パパ？ こんな高級品

「お前、おやつの事になると妙に詳しいな……ほら、輪島さんから貰つたんだよ。お前も覚えてるだろ？ この前の事件の依頼人。娘さんと一緒に是非 だつてわ」

「輪島さん？ ……ああ、あの恰幅の良いお爺さんか。勿論覚えてるよ！」

瞳を伏せながら思案すると、すぐに思い当たつたらしく、すつきりしたような顔をしてい。

「あの人、資産家だろ？ お前がシユークリーク好きだつて教えたら、贈つてくれたみたいだぞ」

「な、成程……」

かつて彼の依頼人であつた輪島といつ男の邸宅は、確かに豪勢だった。

庶民である一人には高級品でも、彼にとつては、安い買い物なのだろう。

と、このように、小さい事務所に住まいながらも、輪島ののような金持ちの客は数多い。

それほど、この事務所の評判は良かつた。

客にとつては、少しきらい依頼料が高かつと、名探偵の力添え

があつたほつが良いに決まつている。

それらは全て、若くして聰明な啓輔の努力の賜物たまものだつた。

実際、初めて彼を見た時の依頼人の反応は大きい。

こんな若造に本当に解けるのか？ などとにかく葉を投げかける者も多いのだ。

「……優？ 何ぼけつとしてるんだ？ 早く食わないと、俺が食つちまうぞ」

「え？ あ、ああ……うん」

父の訝いぶかしげな視線を受け、優は皿の前のシュークリームに小さく噛みついた。

途端、口中にクリームの甘味が広がる。サクッ、とこひ音と共に、口の中でシューが溶けた。

さつぱりしすぎず、しつこくない甘さは、確かにそれが高級だという事を示していた。

甘いものはあまり得意でない啓輔も、薄らと皿を細めている。

どうやら、彼のお眼鏡にもかなつたらしく。

「結構面白いな。これ」

「そりや、スイーツ業界の中では、幻とまで呼ばれるシュークリー

「まだもん！ 美味しいに決まってるよー。」

「ふーん。……ま、いつか機会があったら、また食べような」

「うん。」

こいつの間にか、辺りには和やかな空氣が流れ出す。

そんな時、来客を告げるインター ホンが鳴った。

## 第一話（後書き）

はじめまして、明智 ひなと申します^\_^

まだまだ駆け出し中の身で、駄作ばかりですが(汗)

読んでいただけるといれしいです！

## 第一話

「ア、アポイントメントも取らず、急に押しかけてしま……本当に、すみません！」

本当に申し訳なく思つて居のなら、早く用件に入つてもらいたいものだと、啓輔は心の中で毒づいた。

先程訪れた来客は、未だ年若い少女。速水菜々<sup>はやみ なな</sup> 都内有数の進学校に通う高校生と言つているが、普通の学生がこんな時間帯に居る筈もない。何か訳ありなのは、一目瞭然だ。

顔立ちは中々整つており、同じ年の頃の少年達からには人気があるのかもしぬないが、生憎啓輔にその気は無い。

別段他に仕事があるわけでもないのだが、用件を話す訳でもなく、いつも謝られてばかりいるだけでは埒<sup>らち</sup>があかない。

正直、かなり迷惑だ。

そんな態度が表れてしまつて居のだろうか。少女は、先程から恐縮してばかりだった。

「ええと、お嬢さん。別に、怒つていませんから。そんなに、謝らなくても……」

「あ、えっと、す、すみませんっー」

「……」

啓輔は心の中で、小さく溜息をついた。

と、そんな時　。

「あの、お姉さん……」

「ひやつー。」

優がやってきた。

手には、お客様用のティーカップに淹れられた紅茶と、クッキーを載せたお盆を持っている。

「よろしければどうぞ」

そう言つてにこやかに営業スマイルを浮かべる優は、とても小学一年生には見えなかつた。

実父である啓輔ですらも、あの、笑顔でショークリームを頬張つていた少女と同じ人物だとは、信じがたい。

そう思つるのは菜々も同じらしく、目を白黒させていた。

「え、えっと、この子は一体？」

「娘の優です。優、」挨拶なさい」

「はじめまして。沢内啓輔の娘、優です。以後お見知りおきを」

「は、はじめまして。速水菜々です」

優がお盆を机に置き、菜々に手を伸ばす。

握手を求められているのだと察すると、菜々も、慌てて手を差し出し、手を握り返す。

「緊張しないでも大丈夫ですよ。パパ、秘密は絶対守って貰えますから！」

普段は絶対使わないような言葉使いと微笑みで、依頼人の緊張を解く。

優もまた、沢内探偵事務所を経営する事において、かかせない人物だった。

「ん……そ、それじゃ、そろそろお話をさせて頂いても、宜しいでしょうか？」

「あ、はい。お願いします」

口が重かつた彼女にも、ようやく決心がついたようだ。

伏せていた顔をあげ、真っすぐに啓輔を見据える。

その瞳には、怯えの色が滲んでいた。

「実は私　　ストーカーに遭っているみたいなんです」

菜々は、ゆっくりとそう言った。

啓輔が口を開いたのは、少女の告白から、たっぷり三拍ほどおいた後の事だつた。

明りかに困つたような口ぶりで、少女に問いかける。

「……えっと、ストーカーって、あのストーカーですよね？」

「は、はい。特定の人に執拗しつとうにつきまとう、あのストーカーです」

「……」

啓輔は、相手に気付かれない程度に眉根を寄せせる。

確かに此処は探偵事務所で、探偵もいる。

しかし、“探偵”と一括りに言つても、その種類は様々だ。

頼るなら、警察やらもつと良い専門の探偵事務所があるだらう」と、啓輔は、心の中で溜息をついた。

……いや、仕事にケチを付けるのは、宜しくない。

「や、やつぱり、天下の名探偵さんに、こんな事を依頼しちゃ、失礼ですよね……すみません」

啓輔のさやかな変化を感じ取つたのだろう。

菜々は、再び瞳を伏せる。氣のせいか、田元には薄うりと涙すら滲んでいた……。

幾ら年を食つているとほいえ、啓輔も男。

自分のせいで、少女を涙田にさせてしまった事に、さくりと良心が痛んだ。

心なしか、近くで控えている優からも、冷やかな視線を感じる。

「ほ、本当にすみませんでした。……私、やっぱり失礼しま」

「待つて！」

菜々が席を立とうとする、それを制する声が聞こえる。

……優だった。演技のか知らないが、田元が潤んでいる。

「大丈夫です！　ストーカーなんて女の敵、絶対にパパが捕まえてくれますっ！　だから、泣かないで下さって…」

「もう、いいんです。ありがと、『じざこました』

そう言いながらも、菜々は未練がましい瞳で、啓輔を見つめる。

優の視線が、更に険しくなるのを、啓輔は感じた。

重たい沈黙ちんもくと良心の呵責かじやくに耐えられず、啓輔は半ば諦め半分で頷いた。

「……分かりました。私なんぞで宜しければ」

「やつた！ 菜々さん、パパ、引き受けてくれるそつですー。」

「本当ですか！？ あ、ありがとうございます……」

その途端、一人の表情が綻ぶ。

……まさか、演技？ 一人の突然の変貌に、啓輔は、そつ思わざるを得なかつた。

「それではまず、少し質問をさせて頂きます。優、お前は下がつていなさい」

「はーい」

純真無垢な笑顔を浮かべながら、優は奥の部屋へと入つていく。  
守秘義務と<sup>しゅひぎむ</sup>言つ奴だ。一応、被害者のプライバシーは守つてゐるつもりらしい。

尤も、張り込みやら何やらこはついてくるので、あまり意味はないのだが。

優が奥の部屋へと戻るのを見届けた後、啓輔は、菜々を見つめる。

その表情は、先程とは打つて變つて、真剣そのものだった。

## 第三話

菜々に初めての彼氏が出来たのは、一週間ほど前の事だった。

相手の名は松浦秀樹まつらひでき。陸上部の主将で、男女問わず人気者だ。

菜々の一目惚れから始まって、早数年。

秀樹からの告白まことばで、菜々の片想かたおもていは終わりを告げた。

内気な彼女にしては、中々上出来とこえるだらう。

一人は、幸せっここの生活を送るはずだった。

そりゃ。あの出来事をえなければ。

悪夢の始まりは、一人が付き合い始めた翌日の朝。

菜々が、学校に登校して来た時の事だった。

「菜々、おはよー。」

「あ、ことりちゃんー、おはよー」

学校の校門前。菜々は、親友の塚本琴音つかもとことねに声を掛けられた。

琴音はいつもより明るい笑顔を浮かべながら、菜々を見やつている。

それも無理はない。

菜々の恋を誰よりも応援してくれたのは、他でもない、彼女だからだから。

「菜々、昨日は本当おめでとー。お幸せになーー。」

「あ、ありがと……」

そう言いながら、菜々は小さく俯く。恥ずかしいのか、顔は真っ赤に染まっていた。

「そういえば、朝は一緒にないの？ 昨日は、あんなにラブローブに帰つてたくせに！」

「も、もう、そんなんじゃないよーー。ほら、秀樹君つて陸上部じゃない。朝練早いから、朝は一緒にに行けない、って」

「成程、ね。菜々つたら、めっちゃ愛されてるじゃん！ うりやましいね～」

「ち、ちが…… そんなんじゃないってー。」

「あはは。『メン』『メン』

そんな他愛ない話をしながら、一人は玄関へと入つていいく。

それは、どうにでも売つてゐるような、普通の茶封筒ちやふうとうだった。

ラブレターにしては随分色氣のないそれを見た時、菜々は思わず眉を顰ひそめてしまつ。

そんな菜々の様子に気付いたのだろう。琴音が、いつもより少し不安げな声で、問いかける。

「どうしたの？ 菜々、その封筒……」

「分かんない。何か、下駄箱に入つてたの」

「ふーん」

琴音にも、それがラブレターには見えなかつたらしい。

思わず一人して、封筒をまじまじと凝視きょうししてしまつ……。

「何、入つてるんだろう？」

「そんなに厚みがある訳でもないしね」

菜々は訝しげに封筒を開ける。中には一枚の、紙が入つていた。

封筒と同様、色氣の欠片もない真っ白な紙。

三つ折りにされているのか、傍田はたけでは、何が書いているのかはうかがえなかつた。

力サ 。菜々は、恐る恐る手紙を開ける。

何か、嫌な予感がした。

「えつ！？ な、何よ、これ……」

「嘘うそ、でしょ……？」

菜々は、怯えた顔で親友を見やる。

紙面に刻まれているのは、ワープロで打たれた赤い文字。

そこには、“松浦秀樹と別れる”と、書かれていた 。

氣が付くと、菜々は泣いていた。

余程辛かつたのだろう。肩が小刻みに震えている。

「それを見た瞬間、私、もう頭の中が真っ白になっちゃつて……。  
彼が人気者で、こういう事はありえる、っていうのは分かつていた  
んですけど 」

「……脅迫状きよつけじょうですか。それだけでも、充分犯罪ですね」

それを聞きながら、啓輔は内心身震いしていた。

女といつのは、些細な嫉妬心でも、ここまで残酷になれるものなのだ」と。

その内優も、じたな恐ろしい事をしでかさないだろうか、といつ考えが頭を過る。

いや、あのお氣楽少女に限って、そんな事……。

「わ、沢内探偵？ どうされたんですか？ 顔、真っ青ですけど……」

…

「 いえ、すみません」

啓輔は一つ咳払いをし、馬鹿な考えを頭から追い払う。依頼人を信じじる筈の探偵が、自分の娘を信じられなくてどうするのだ。

「被害は、他にも？」

「は、はい。……いろんなの、まだ、序の口だったんです」

そう言つと菜々の表情が再び暗くなる。

一度は止まつたかと思われた涙が、再び戻ってきたようだ。

瞳の淵には、涙が溜まっている。

「……本当の悪夢が始まったのは、その晩からの事でした」

「

その晩、菜々は落ち込んでいた。

どこか様子のおかしい菜々を、秀樹も色々と気にかけてくれたのだが、まさか当時者に相談するわけにもいかない。

訝しげな彼の言葉にも、曖昧に微笑むしかなかつた。

「あたし……ビリijoif」

菜々は、自室のベッドに飛び乗り、盛大に溜息をつく。

自分は、れつきとした彼女なのだ。

脅迫なんかに怯まないで、堂々としていればいい。

分かつてはいるのだ。……ただ、そう振舞<sup>ふるま</sup>うのは、内氣<sup>うちき</sup>な菜々には中々難しい。

もしかしたら、自分は彼に相応しくないんじやないか  
と思つてしまつ。

菜々は思考の悪循環に陥つていた。

と、そんな時。

部屋中に、聞き慣れたケータイのホール音が鳴り響く。

菜々は慣れた手つきで、通話ボタンを押した。

「もしもし、菜々ですけど」

「」

「え？ すみません。もう一度お願ひします」

相手の言つ事が、いまいち聞き取れない。

電波の状況が悪いのかと思い、一度アンテナを確認するが、きちんと三本立っている。

「もしもし。どう様ですか？」

「」

それでも電話は、うんともすんとも言わない。

きりんと通話時間が表示される事から、壊れている訳ではないらしい。

「……もしもし？ 貴方、一体」

ブチンッ！ 突如、乱暴に電波が途切れた。

どうやら相手が切つたらしい。全く、一体何の用だといつのだ……。

「もう、一体誰が……っ！」

かけなおそじと、着歴を見た時、菜々は、背筋が凍るのを感じた。  
非通知。受信歴には、そう刻まれている。

菜々はようやく、それが無言電話だったのだと気付いた

。

## 第四話

無言電話に脅迫状。

昨日起こつたばかりの出来事で、菜々の頭はいつぱいになっていた。

今日も、昨日と回じへり——いや、昨日より酷い気分だ、と菜々は思つ。

この事を、秀樹に相談しようつと、何度も考えたことだひつ。

しかし、ただでさえ陸上部主将という立場で、ストレスを抱えているところに、さらに心配事を増やしてはいけないだらつ……といつ複雑な思いから、どうしても言いだせないので。

「 み、速水。呼ばれてるぞ」

「 ……え?」

隣から困つたようなクラスメートの囁き声が聞こえ、菜々は今、授業中だという事を思い出す。

前を見やると、厳格な事で評判の数学教師、青木あおきが頬を引きつらせている。

それを見た瞬間、菜々は一気に現実に引き戻された。

「速水。何、ぼけつとしているんだ?」

「す、すみません！」

慌てて謝るが、彼は相当立腹のようだ。田が全く笑っていない。  
「余程俺の授業が退屈しそうな。いい度胸だ、速水。この後、職員室でゆっくり先生とお話ししような」

青木は、“ゆっくり”の部分を特に強調して言った。

昼休み。菜々がこっぴどく叱られた後、職員室を出ると田が見慣れた姿があった。

……秀樹だ。

壁に寄りかかってどこか遠くを見る様な目をしていたが、菜々が帰つて来た事に気付くと、ゆっくりと視線を向けた。

「秀樹君？ どうしたの、こんな所で……」

「ん、ああ。菜々が、青木に説教ぐらつてる、って聞いてさ。どうしたのかな？ つて思つて」

そういうながら秀樹は、にかつと爽やかな微笑みを浮かべる。

昨日の事も含め、少しブルーだった菜々にとってその笑顔は、とても安心できるものだった。

「昼、まだだろ？一緒に食べよ」  
「ばー」

「え？ 秀樹君、お昼まだなの？ だって、もう昼休み始まって、  
随分経つよ……」

現時刻は、一時過ぎ。昼休みが始まつて、三十分ほど経つていて。

流石に、二の時間までお昼抜きは辛いものがあるだらう。

男子の秀樹なら、普段は食べ終わつてゐる時間帯のはずだ。

「ばーか。大事な彼女が怒られてんのに、一人で飯なんか食える訳  
ないだろ。早く弁当とつて来いよ。ここで待つてる」

「あ、ありがと……」

秀樹の精一杯の優しさに、菜々は心が温かくなる。

今なら少しだけ、昨日の事すら忘れられる気がした。

駆け足で教室までの道を往復して、早五分。

菜々が職員室前に戻ると、そこには一人の人影があつた。

一人は言つまでもなく、菜々の愛しの彼氏である秀樹。

もう一人は……陸上部のマネージャーの少女だ。名前は確か、菱  
本舞花 もとまいか。  
。

クラスメートで、幼馴染であるという一人は、仲睦まじげに立話をしていた。

「あ、菜々。お帰り」

そのうち、秀樹が菜々に気が付く。

舞花への視線をそらし、菜々に微笑みかけた。

「じゃ、舞花。俺、これから昼だから」

「秀樹……あんた、まだお昼食べてないの？ あつきた。今の今まで、何をしていたのやら」

舞花は大袈裟<sup>おおげさ</sup>に肩を竦<sup>すく</sup>めてみせる。

その様子は、二人の仲はかなり親密だといつ事をつかがわせた。

「まあな。行こうぜ、菜々」

「うん」

……その時、菜々は、背後から冷たい視線を感じ、咄嗟<sup>とっさ</sup>に後ろを振り向く。

そこには、先程までの朗<sup>ほが</sup>らかな笑顔とは対照的に、感情の読み取れない無機質な表情を浮かべた舞花がいた。

秀樹と仲良さ気に歩く菜々を、じっと睨みつけている。

「菜々、どうした？」

「あ、「メン。今行くね」

思わず止まってしまった菜々に、秀樹が声を掛ける。

歩きながら、もう一度後ろを振り向くと、舞花の姿は既に消えていた。

数分後。一人は屋上の隅に腰を下ろす。

いつもは定番のお昼スポットであるここも、時間が時間なだけに人つ子一人いない。

二人の貸し切り状態だ。

「……で、菜々。どうしたんだよ……いつも真面目なお前が、青センに怒られるなんて。本当、珍しい事もあるもんだよな」

「ん、ちょっと、考え方して……。その時、ちょうど指されたみたい」

「あ～あるある。あの先公、人が考え方してる時とかに限って指してくるんだよな。俺もよく怒られる」

「秀樹君の場合、眞面目に授業受ける気が無いのが原因じゃない？」

「はは、バレた？」

他愛ない会話を交わしながら、菜々は持参の弁当箱を開ける。

両親が共働きの彼女は、お弁当もお手製だ。

ちなみに、秀樹の毎日は購買で買ったパンだ。

ペットボトルのお茶で喉を潤しながら、焼きそばパンに醤りついでいる。

「でさ、菜々。お前、本当どうしたの？」

「え？」

いつの間にか、和やかなムードは吹き飛んでいた。

あまりにも突然の変化に、菜々は少々面食らう。

「青センが機嫌悪いのはこいつもの事だけ……。お前、昨日から様子変だよ？ 何かあったの、ばればれ。無理に、とまでは言わないけど、相談くらいならのつてやるし。……それとも、俺じや頼りにならない？」

「そ、そんな事……！」

秀樹は、酷く傷ついた顔をしていた。

## 第五話

出会つて数年。彼の、こんなにも悲しそうな顔見るのは、初めてだった。

真剣な秀樹の眼差しに耐えきれず、菜々は目を伏せる。

そんな彼女を許さない、とでもこいつよつて、秀樹は菜々の頬に手をやり、無理矢理目線を令わせた。

「田、反らすなよ。そんなにやましい事、隠してるわけ？」

「ち、違つよ！ 私、そんな事……」

「じゃ、何で話してくれないの？ 昨日からずっと上の空だし。何考えてんの、菜々？」

秀樹が心の底から心配しているのは、菜々にも伝わった。

しかし、本当に話していくのだろうか？ 本当に、迷惑にならないだろうか……？

菜々の心は、揺れていた。

そんな戸惑いを感じ取つたのだろうか。不意に秀樹が、ふつと微笑む。

「俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔してんの、見たくない」

「秀樹、くん……」

「だから、話して？ 辛いなら、我慢すんなよ」

その言葉が、菜々の心を溶かす。

菜々の頬に一筋の涙が流れおちると同時に、堰せきを切ったように、  
言葉が溢あふれだした。

全てを話し終えると同時に、菜々は、心が軽くなるのを感じた。

秀樹は黙つて聞いていたが、菜々が言つ終ると同時に、そつと  
身体からだを引き寄せた。

「菜々。じつち、向いて」

「え？」

秀樹の言葉に少し驚きながら、菜々は、涙で濡れた顔を向ける。

その瞬間、額に軽い痛みを感じる。じつや、パソコンをへりつ  
たようだ。

「いたつ……な、何するの？」

「何でそんな大事な事、今まで黙つてたの？ 僕、そんな信用ない  
？」

秀樹の頬は、小さく膨れています。少し、機嫌きげんが悪いようだ。

「「」、「」めん。秀樹君、陸上部の主将もやつてゐし、色々大変なのに、私なんかのせいで心配事増やしたくなくて」

「ばーか。好きな女の子が悩んでるの」「心配しない男がいるわけないだろ？ もし、これからもこいつ事があつたら、絶対相談してくれよな？」

そう言つと、秀樹は小さく微笑む。

しかし、その笑みはすぐに真面目なものへと変わった。

「……で、話を戻すけど。菜々、それ立派な犯罪だよな？ 脅迫罪きよはっけいだけ？ 僕、警察に言つた方が良いと思つ」

「警察？ だ、だつて、たかがこんな事で」

「じゃあお前は、“たかがこんな事”」「そんなに悩まされてたのか？ 脅迫状は？ ちゃんと証拠もあるなら、警察だつて動いてくれるだろ」

「でも」

「帰つた後、一緒にに行こう？ 被害者はこっちなんだし、そんなに邪険じやけんに扱われる事もないだろ」

秀樹は、人を安心させる笑みを浮かべる。

少し躊躇<sup>ためら</sup>いがちに、菜々は頷<sup>うなず</sup>いた。

「ただいま」

菜々は小さく咳きながら、家の扉を開ける。

その声に、返つてくる言葉はない。

両親が共働きで、尚且つ放任主義で帰りも遅い為、菜々は実質一人暮らしも同然だった。

警察署からの帰りの為、いつもより帰宅時間は遅めだ。

秀樹の言つとおり、被害者にあたる菜々は決して邪険には扱われなかつた。

鞄<sup>かばん</sup>の奥底に入りっぱなしになつていた脅迫状を見せると、身辺警護の強化を約束してくれた程だ。

“また何かあつたら、すぐに来て下さい”

最後に優しく伝えられた言葉が、未だ菜々の耳に残つていて、離れない。

「やつぱり、行つてよかつたな。秀樹君に、明日ひやんとお礼言わないと……」

心配してくれる秀樹や琴音達のおかげで、菜々は昨日の事にも、大分立ち直れつつあった。

と、そんな時。再び、携帯が「ホール音を鳴らす。

菜々はディスプレイを覗き、発信者の名前を確認する。

発信は 非通知。

「……もしもし、菜々です」

「」

昨日と同様、相手は何も言わない。

同じ相手……ストーカー犯だ、と菜々は確信する。

先程までは違つ、落ち着いた、冷静な口調で菜々は言ひ。

「もしもし。……よく、聞いて。私は、あなたなんかに屈しない！  
あなたがどんな姑息な手を使つても、絶対秀樹君とは別れないか  
らー！」

ブチーンッ！ 今度は、菜々が乱暴に電源ボタンを押してやる。

久々にすかつとした気分になった。

「私は、こんな奴に負けない……。絶対、負けないんだからー！」

同じ事を口にすると、段々と勇気が満ち溢れてくるのを感じる。

菜々は、名も知らぬ相手に、絶対に屈しない事を誓つた。<sup>ちか</sup>

だが彼女は知らない。その誓いは、数日後には跡形もなく崩れ落ちてしまう事を。

彼女を苛む悪夢は、まだ続く。

## 第五話（後書き）

第三話の文章内におかしな部分があつたので、一部改訂させて頂きました。

物語の内容には全く差し支えないでの、読みなおされなくとも大丈夫です！

今後とも、沢内探偵事件録を宜しくお願ひいたします m(—)

m

## 第六話

翌朝。菜々がそろそろ登校しようかと思つた頃、来客を知りせるベルが鳴つた。

菜々はインター ホンのモーターを覗きしみ、来客を確認する。

琴音だつた。菜々が見やつてると気付くと、小さく手を振る。

「ちよつと待つて！」

一言声を掛けてから、菜々は急いでドートを羽織り、鞄を手に取る。

もう少し経つてから行いつゝと思っていた菜々にとって、突然の来客はかなり驚きだつた。

「ゴメン、待つたよね？」

「ううん。私じや、急に来ちゃつてごめん。ほひ。菜々、最近色々あつたじやん。だから、朝くらい一緒に行って、話をいつと思つたんだけ……迷惑、だつたかな？」

琴音は、少し困ったように笑つ。何の連絡もなしに訪れた事に、罪悪感を抱いていたようだつた。

彼女の家だつて、菜々の家から決して近いわけではない。

遠回りをする、とまではいかないが、かなり余計な時間をくつた筈だ。

そんな心遣いさえも、今の菜々には有り難かつた。  
じこゆか

「ううん。……私なんかのために、ゴメンね？ 気遣つてくれて、  
ありがと」

「気遣つてなんかないって。私、菜々の傷つく顔が見たくないだけ」

「ありがと」

“俺の事気にしてんなら、大丈夫だから。俺、お前がそんな顔して  
んの、見たくない”

琴音の言葉に、不意に既視感を覚える。昨日の事を思い出し、菜  
々は思わず、ふわりと微笑んだ。

「どうしたのよ。菜々、今日は随分元気じゃない」

「ふふ、……実はね」

少し照れくさかったが、菜々は、昨日あつた出来事を琴音に話す  
事にする。

微笑みながらのろけ始める菜々の話を、琴音は、曖昧に微笑みな  
がら聞いていた。

話し始めて、どれくらいの時間が経つただろうか。

気がつくと一人は、学校に到着していた。

今まで、黙つて菜々の話に耳を傾けていた琴音も、流石に苦笑しながら口を挟む。

「菜々ったら、本当松浦君に首つたけね。あんたみたいな彼女持てて……松浦君、本当幸せ者なんだから」

「そ、そんな事ないよ………！」

菜々は照れ隠しに首を振る。頬ほおが真つ赤なのは、寒さのせいだけではないだろう。

そんな他愛ない会話すらも、本当に楽しかった。

彼女達の会話が聞こえてきたのは、本当に偶然だった。

休み時間。菜々が用を足し終え、個室から出ようとした時——人の少女の声が聞こえたのだ。

「ねえ麻美まみ、松浦君に彼女出来たって噂、本当なの？」

「うう……しかも、相手は舞花じゃないんだって……。あたし、

本人から聞いたもん

「マジで！？ 舞花と松浦君って、付き合つてたんじゃなかつたの？」

どうやら二人グループのようだつた。

声に聞き覚えが無い事から、恐らく他のクラスの女子なのだろう。

生徒数が多いこの学校なら、決してあり得ない事ではなかつた。

そして 噂の中心は、菱本舞花。出でいける状況ではなく、菜々はその場に立ち尽くした。

聞きたくない！ という菜々の心情とは裏腹に、少女達の雑談は続いていく。

「だつて舞花つて、松浦君追つかけてこの高校入つたんじよ？ ぶつちやけ、元々そんなに頭が良いわけでもなかつたらしいよ」

「陸上部マネだつて、松浦君田当てで入つたらしいしね」

「それが本当だつたら、舞花めつちや 可哀想じやん！」

「小学校からの幼馴染だつけ？ 健氣だよね～」

少女達の一言が、菜々の心に深く突き刺さる。

……そして、それと共に湧きあがる疑惑。

ストーカー犯人つて、もしかして……。

よく知らない人に対する勝手なイメージに、菜々は嫌悪感を覚える。

……しかし、有り得ない話ではないのだ。

陸上部で朝練がある彼女なら、早朝のうちに脅迫状きょうつけいじょうを忍び込ませておく事くらい、可能かもしれない。

非通知で電話する事だつて、別に難しい話ではない。

電話番号をどうやって知つたのかは問題だが、そんな物は、友人達にそれとなく聞けば済む話だ。

秀樹君に、相談しなきや……。

少女達が立ち去つた後も、菜々の頭の中は、菱本舞花の事でいっぱいだつた。

昼休み。菜々は、休み時間思つた事を打ち明ける為、秀樹の教室へと向かつた。

これまでも、彼と共に昼食をとつた事は何度かあつたが、内気な菜々から誘つるのは初めてだつた。

少し緊張する。  
ときどきやけくじょうする。

やがて教室に近づくと、菜々は恐る恐る辺りを見回す。

見慣れない顔ぶれの中に、彼は いた。仲が良いのであらう男女達と談笑している。

舞花と話していない事に、菜々は少しだけほつとする。

人ごみの中に、彼女の姿は見えない。

恐らく、他の友人達とお昼を食べに向かっているのだろう。

菜々は、扉近くで談笑している男子グループに向かつて声を掛ける。

「あ、あの 松浦君、呼んで貰えませんか？」

「あんた、秀樹の彼女？ 秀樹ー！ お前の愛する彼女が来てるぞ」

グループの中心格らしき少年が、クラス中に呼びかける。

その瞬間、教室にくすくす笑いが広がった。

菜々の頬は真っ赤になるが、とうの本人である秀樹は、いつもの笑顔で受け答えしている。

そして、菜々の元へと訪れると、いつもと変わらない明るい声で問い合わせた。

「菜々、急にどした？ お前から誘いに来るなんて、珍しいな」

「あ、あの。突然、コメンね。い、一緒にお皿でもどうつかな?  
……つて思つて」

表情や<sup>じぽう</sup>声<sup>こ</sup>面<sup>おもて</sup>から、菜々の言わんとする事を、秀樹は瞬時<sup>しゅんじ</sup>に察した  
よつだ。

いつも浮かべている笑みが一瞬にして消え、真面目な顔へと変わ  
る。

「……分かった。ちょっと待つて、昼飯取つてくる」

秀樹は踵<sup>きびす</sup>を返すと、元居た席へと戻つていく。

菜々は小さく、深呼吸をする。心なしか、少し緊張が薄れた気が  
した。

## 第六話（後書き）

改訂前 琴美 ?

改訂後 琴音 ○

内容自体に変更はありません（汗）

## 第七話（前書き）

じゅうじゅく更新できず、申し訳ありませんでした m(—)m  
お暇なときにでも、お読みいただけると嬉しいです！

## 第七話

一人がやつてきたのは、人目につかない校舎裏だった。

薄暗く、じめじめとしたことは、人っ子一人いない。

皆、食事をとるなら、もつと明るい食堂や、屋上、中庭などに向かうからである。

「いいでいい？……あんま、話聞かれたくないんだ？」

「うん。気遣ってくれて、ありがと」

「いや。気にしてない」

彼の瞳は、いつもより真剣だった。

普段は明るい人がこの表情を浮かべると、なかなか怖いものだと菜々は思った。

「で、どうしたんだ？ 昨日の事で、また何かあった？」

秀樹の問いに、少し口籠る。  
くわいじめ

彼の幼馴染もある、という舞花の名を出すのは、少し怖かった。

今更、後にはひけない そつ思いなおし、菜々は口を開く。

「 私、犯人、分かったかもしない……」

「本当かよー? い、一体誰が?」

「菱本さん、じゃないかなって思つてる」

「菱本……って、舞花が!?」

予想以上に驚かれ、菜々はびくじと肩を震わせる。

いつもの彼ならそこで謝るのだろうが、菜々の告白はかなり衝撃的だったらしい。

かなり表情が強張っている。

「 ありえない。まさか、あいつが……」

しばしの沈黙の後、彼が呟いた言葉は“ありえない”だった。

その後も、まるで狂った機械のように、“ありえない”と連呼する。

しかし、菜々は確信していた。彼女が犯人である、と。

確たる証拠が無くとも、あの時感じた視線が、菜々に真実を告げていた。

「菜々。お前、多分勘違いしてると想つ

「え？」

気が付くと、彼は同じ言葉を繰り返すのをやめていた。

ただ、悲しげな瞳で菜々を見つめている。

「俺、あいつの幼馴染だから、よく知ってるんだ。……あいつ、舞花さ、そういう曲がった事が大嫌いなんだよ。弱い者<sup>いじ</sup>めとか、嫌がらせとか。昔からそういう事があると、真っ先に止めさせてたんだ。悪いけど、俺には、舞花が犯人だとは思えない」

「…………」

その言葉に、菜々は、ズキン と胸の奥が痛むのを感じる。

秀樹の口調からは、彼女を大切に思っている、といつ事がよく伝わってきて……。

不意に菜々は、休み時間の少女達の会話を思い出す。

“マジで！？ 舞花と松浦君って、付き合つてたんじゃなかつたの？”

周りから見れば、菜々と秀樹なんかより、舞花と秀樹の方がお似合いに見えるのだろう。

小学校からの幼馴染 といつ言葉が、急に菜々の頭の中を駆け巡る。

「……やっぱり、秀樹君には、菱本さんの方がお似合いなのかな？」

「菜々、何言ひたの？」

「「」あんな、折角呼びだしたのに、嫌な気持ちにならなかつて」

「こや。別に、やつこいつわけじや……」

セレード、よつやく秀樹はハッとした表情を浮かべる。

菜々に嫌な思いをさせてしまつた、といつのが、直感で分かつたようだ。

「悪い。お前の気持ち解えないで、自分の事ばつか喋つちやつて」

「うん。私も、『メン』

口で『』やつが、菜々の口調は沈んでいた。

秀樹にもそれが分かるらしご。困つたよつて膾根を寄せてくる。

「「」うれしいも。変な事話つちやつて、『メンね？』

「え。でも菜々、全然食べてな」

「「」めんなさい。」

菜々は、まだ半分以上残つている弁当を手早く包み、立ち上がる。

そして、駆け足でその場から立ち去つた。

秀樹君が悪いわけじゃない。……分かつて、そんな事。

これは、ただの我儘わがままで、逃げ出しちゃいけなかつた、つて、分かつてる。

分かつて、いたのに どうしても、その場にはいられなかつた。

どれくらいの時間が経過したのだろう。

気が付くと、菜々は校舎裏のトイレにいた。

あまり人の訪れないここには、菜々以外誰もいない。

そこで菜々は 声を押し殺して、泣いていた。

人がいないのだから、嗚咽おえつをこらえる必要は全くないのだが、無意識にもし誰か来たら といつ恐怖が脳内を支配しているのか、大声で泣く事は出来なかつた。

「菜々！」

その時、菜々の耳に聞き慣れた声が飛び込む。

普通なら、わざわざ暗い旧校舎まで足を運ぶ筈がない。

菜々を探しに来た と頭で理解する前に、菜々は、彼女が今、

もつとも会いたくて、会いたくない者の名を呟いた。

「……秀樹、君？」

「残念でした。悪かつたわね、松浦君じゃなくって」

「その顔……」「ど、ちやん？」

セヒロは、呆れたよつた苦笑を浮かべる、親友の姿があった。

琴音は小さく肩を竦め、ポケットからハンカチを取り出し、そつと手渡す。

「なんて顔してんのよ。折角の可愛い顔が、台無じじゃない」

「……んで、いい？」

「松浦君に言われたのよ。“菜々と喧嘩した。謝りたいから、探すのを手伝ってほしい”ってね。もう、大変だったんだから……。多分松浦君、今も走り回って、あなたの事探してる」

琴音の口調は、厳しかった。

暗に、早く秀樹の元へ戻れ　と言わんとしているのが、菜々にも伝わってくる。

「……今、会いたくない」

「あんた、何言つてるの？　何があつたわけ？　朝は、あんなに元気だつたくせに」

「……つく」

「な、菜々？」

嗚咽混じりに、菜々は事の顛末てんまつを話し始めた

。

## 第八話

「成程、ね。菱本さんが怪しい、って訴えたら受け入れて貰えないで、その麻美つて子の悪口を不意に思いだした　ねえ」

「皆、私と秀樹君なんか似あわない、って思ってるに決まってるんだよ。ことちゃんたつてどうせ、心のどこかで、そう思ってるんでしょ？」

「馬鹿ばかね。そんな事、思つてるわけないでしょ。心配しなくても、二人は充分お似合いだと思つわよ」

「嘘うそ、つわ」

菜々は先程と比べると少し落ち着いてきたものの、未だ情緒不安定じゅうぶつかんめいだ。

瞳を潤ませ、ぐすつ、と鼻を鳴らしている。

「……じゃ、別れれば？　そんなに松浦君の事が信頼できないなら、別れた方が良いと思う」

「それは嫌！　だって、私　」

「考へてもみなよ！　今回こんな事態を招いたのも、元はといえば、二人が付き合いだしたのが元凶げんきゆうでしょ？　だったら、今まで通りの友達同士に戻れば、万事解決ばんじじゃないの？」

「……それは、ただけど」

確かに、琴音の言つ事も一理ある。

それでは犯人の思惑通りではあるが、ここまで精神的に追い詰められているのなら、まだそっちの方がマシ、なのかも知れない。

琴音が、嫌がらせの為だけで“別れた方がいいかもしない”と言つたわけではない。

菜々の事をきちんと思つた上で言つて居るというのは、彼女にも分かつていた。

……それでも、簡単に納得がいくものではない。

と、そんな時。

キーンゴーンカーンゴーン　と、昼休みの終わりを告げるチャイムが、二人の耳に飛び込んだ。

「昼休み、終わっちゃったね。急いで戻らないと、授業に遅刻しちやうよ。菜々、行こ？」

「……うん」

頭の使いすぎなのだろうか。酷く気分が悪い。

意識の霞かすんだ頭を振り、菜々は教室への歩を進めた。

気分の不調は、教室へ戻つてもなかなか治らなかつた。

それどころか、寧ろ悪化すらしている。  
む

妙に肌寒いのは、気温だけのせいではないだらつ。

黒板を見るのも氣だるく、菜々は窓の外を、ただぼーっと見やつていた。

「速水?」

「え、あ　　はい」

ふと教師に名を呼ばれ、菜々は慌てて前を向く。

話を聞いていなかつた事を咎められるかと思い、身を竦めたが、教師は心配そうな顔を向けていた。

「お前、顔色が悪いぞ。大丈夫か?」

「だ、大丈夫です」

そう言つてみると、教師の表情は晴れない。

教師は一つ溜息を吐き、前方に座る少女に呼びかける。

「石田、お前確か保健委員だつたよな?　悪いけど、速水の事、保健室まで運んでつてくれないか?」

「分かりました」

石田、と呼ばれた少女は、ゆうくつと立ち上がると、菜々の席へとやつてくる。

そして、彼女の耳元で小さく囁いた。ささやか

「大丈夫？ 顔、真っ青じゃん。行こつか

「 ありがと、石田さん」

あまり親しくない少女だが、快く菜々に接してくれた。

菜々が弱々しく微笑むと、そつと笑いかえしてくれた。

その優しさに心を温めながら、菜々は立ち上がる。

クラス中の視線が降り注そそがれていたようだが、あまり気にならなかつた。

「38度、5分……ね。随分高熱じゃない。石田さん、悪いんだけど、担任の先生に早退する旨むね、伝えてもらえないかしら？ できれば、荷物の用意もしてくれると嬉しいわ」

「分かりました。……速水さん、お大事にね」

最後に小さく手を振った後、保健室から石田が出て行き、室内には、校医の先生と菜々の二人だけが残った。

菜々は、無理矢理校医にベッドに寝かしつけられる。

ベッドに横たわると、少しだけ気分が楽になつた気がした。

「速水さん、お家にいらっしゃる？」

「いえ……、つち、共働きなので」

「そう、分かったわ。先生が家まで送つてこつてあげる。……つと、その前に、病院行かなくちゃね」

「あ、いえ、そこまではもううんて、悪いです」

「良じから良じから……あ、起きなくていいかい。石田さんが来るまで、寝てなさい」

「あつがと、『やむこます』」

必要最低限の事を話しありとすると、氣を遣つて居るのか、それ以上は何も言わなくなる。

わざわざいろいろ話しかける事もなく、菜々は氣だるい身体に意識を委ねた。

過労からくる、ストレス性のものと、医師には、やつ診断された。

要は、最近起つて居る事実に、体が付いていかなくなつた、と

いう事だ。

気の弱い菜々には、よくあることだった。

心配そうな顔の校医の好意に甘え、結局菜々は家まで送つてもらつた。

一階のコンビングにあるソファーに身を委ね、熱で朦朧とする意識の中、菜々は今まであつた事を思い返す。

(はじめりは、あの脅迫状きよいじょうだったのよね)

全てが狂い始めたのは、あの日の手紙から。

それからは、数は決して多くないものの、纖細せんざいな菜々の心を傷つける出来事が何度もあった。

(考えてみれば、あの後ストーカー犯から受けた被害つて、無言電話が一件だけなのよね。こんな事で一々傷ついて、皆に迷惑ばつかけちゃうし……)

はあ　と、菜々は深い溜息を吐く。

いつして難しく考えてしまうのは悪い癖だ、と自分で分かつてはいるのだが、中々直せるものではない。

(……ああ、もう、嫌になっちゃうよ)

そんな菜々の思考の悪循環あくじゅかんを止めたのは、今話題の、人気歌手の曲だった。

音の発生源に、菜々はすぐに思い当たる。

……ケータイだ。確か最近、メールの着信音を「」の音に変えた記憶がある。

(誰だろ……琴音、かな?)

昼休みの事もあり、正直あまり会いたくなかったが、気づいているくせに返信をしないのは、失礼にあたる。

ぼんやりとする意識の中、菜々はほほ無意識にケータイを開く。

それが、先程までちょうど考えていた、ストーカー犯からのものだったら という発想など、思いつきもせずに 。

『新着メールが一件届いています』という無機質な文字が、ディスプレイに浮かんでいる。

発信者は 知らないメールアドレスだった。

『お前と松浦秀樹は釣り合わない。早く別れ!』

たつた、それだけの短い文面。

確かに嬉しくはないが、そこまで酷い内容ではないだろう。

しかし、……時期が悪かった。

昨日の菜々なら、そのメールを無視するか、“ふざけるな”メールを送り、自分の持つていいアドレスを駆使し、片っぱしからそのアドレスの持ち主探しに勤しんでいたのだろうが、今日の菜々は、いつもより更に心が脆かつたのだ。

琴音 そして、秀樹の顔が、頭をよぎる。

親しげに舞花と話す、愛しい、大好きな彼氏……。

(私……もう、二人の顔、見たくないよ)

酷い頭痛とともに襲う、激しい胸の苦しみ。

胸の奥のわだかまりに耐えきれず、菜々は泣いた。

頭に浮かび続けるのは、楽しげに微笑み合つ、秀樹と舞花。

菜々には入つていけない空間だった。

(私、こんな気持ちのまま、秀樹君に会えないよ)

秀樹と顔を合わせるのが無性に怖かった……。

その日から菜々は、学校に行つていない。

## 第八話（後書き）

はい。ようやく過去編（？）が終わりました。

この後は現在に戻り、あの探偵さんが活躍してくれるはずです！

……多分。

こんなグダグダ駄文ですが（汗）　お暇なときにでも、読んでいただけると嬉しいです

## 第九話

……隨分<sup>すいぶん</sup>と、長い話だった。

否、話の内容だけが長かった訳ではない。

話の途中で菜々が嗚咽を漏らし始め、一旦会話が中断される、といつ事が、多々あつたのだ。

最初の時のように、意味も無く口籠る事は少なかつたので、苛立ちまではしなかつたが、基本的には気の長い啓輔でさえも、実を言うと、少し苦痛に感じる時があつたほどだ。

勿論、そんなものは表情にはおぐびにも出さなかつたのだが。

啓輔は、事務所の壁にかけてある時計を見やる。

現時刻は、午後七時半　彼女が来てから既に数時間経過していた。

窓を見やると、いつの間にか、外は真っ暗だ。

ただでさえ暗くなるのが早い冬。女子高生が一人で帰るには、少し危険な時間帯だ。

啓輔は、腰かけていた長椅子から立ち上がり、玄関近くのフックに掛けているコートを手に取つた。

「送りましょ。家は、どの辺ですか？」

「あ、いえ、大丈夫です！ じつか、お気になさりません」

突如、菜々は慌てふためく。

彼女は、話を聞いていて感じた、氣の弱い少女、という印象通りのようだった。

啓輔は、いつも以上に真剣な瞳を菜々へ向ける。

「速水さん。貴女、この自分の立場、分かつていらっしゃいますか？ 幸いにもまだ、体に影響は無いですが、いつそのストーカー犯に何をされるか、分かりません。只でさえ変質者も多いのですから。……大丈夫です。何も、取つて食いやしませんよ」

「でも、私、本当に……」

「……分かりました。ではせめて、タクシーに送らせましょう。少し高くなきますが、ストーカー犯や、変質者に追われるよりはマシでしょう？」

「は、はい。そうします」

タクシー、とこう手段で、ようやく菜々は納得したようだ。

ペーリと頭を下げ、事務所の出入り口の扉を開ける。

せめて近場の大通りまでは送つて行こう と、啓輔もその後に続いていった。

啓輔が事務所に戻ると、長椅子に腰かけ、不機嫌そうに頬を膨らます少女が目に映った。

優だ。会話が長く退屈だったのと、無断で外出された事に対して、腹を立てていていた。

……後者はともかく、前者の場合は、彼女にも責任があるよう気がするが。

優は、表情に合った不機嫌そうな声を出す。

「随分遅かったね。菜々さんの話が長かったのは知ってるけど、まさか最後に口説きにかかるとは思わなかつたよ」

「……は？」

「だつて、いい年したおじさんが、か弱い女子高生を一人きりで車に誘つた上、『何も、取つて食いやしませんよ』なんて気持ち悪い台詞言つなんて、明らかにナンパつた！ い、痛い！ 止めて！」

「『ど』をどつ捕えたから『解釈』になるんだ！ この馬鹿！」

啓輔は、両手で拳骨を作り、優のこめかみにぐりぐりと押し当てる。

俗に言つ梅干という奴だ。かなり痛いらしく、優の瞳には薄らと涙が滲んでいる。

啓輔はしばらくそれを続けていたが、優の口から“ごめんなさい”といつ言葉が出てくると、よつやく手の手を止めた。

優は小さく頭をさすりながら、きつ、と啓輔を睨みつける。

「……パパ、ちょっとは加減してよね。これ児童虐待だよ？<sup>さやくたい</sup>訴えられちゃうよ？」

「この程度で訴えられるなら、全国の親達は今頃全員刑務所だろ」

啓輔は呆れた顔で娘を窺める。<sup>たじな</sup>

優は未だ膨れていたが、ふと思いつたように、啓輔に問いかける。

「で、パパ。明日からどうするの？ 大方、犯人の目星は付いてるんでしょ？」

「お前…… わては、聞いてたな。まあ、大体はな」

その言葉に、優はすっと目を細める。彼女曰く、思考が推理モードに切り替わった、といつぱんらしい。

尤も、どうせ何か言つ時は、ワトソン博士もびっくりの迷推理なので、啓輔が真面目に聞いた試しは無いのだが。

「で、これからどうするの？ まさか、今から高校まで直行……なんて、言いださないよね？」

「今何時だと思ってるんだ。これから急いで行つたとしても、着くのは八時半頃　とっくに既、帰つてるだろ」

菜々曰く、陸上部の活動が終わるのは、いつも大体六時頃だそうだ。

事務所から彼女達の通つ学校までは、多く見積もつて約一時間。すると、帰りは大体七時半過ぎ……関係者からの話が長引いたり、渋滞などがあつたら、もっと遅くなるだろう。

啓輔は、帰りが適度に遅くなる時間の場合は、夕飯や防犯などの関係上、出来るだけ優を同行させる事に決めていた。

まあ、ただ単においてけぼりにされて拗ねる娘をあやすのが面倒という理由もあるのだが。

「優。明日は、帰るの少し遅くなりそうなんだけど

「勿論一緒に行くよー。」

「……俺、まだ全部言い終わっていないんだけど

「助手兼次期沢内探偵なんだから、事件に同行する権利くらいはあるでしょ？」

「次期沢内探偵、ねえ」

偉そうに腰に手を当てる少女は、とても探偵には見えない。

優も、あと数十年もすれば、立派な探偵になつてゐるのか　と、  
啓輔は思い耽るが、すぐに首を振る。

「無理だ。俺には想像できない

「パパ、今何かすごく失礼な事考えてなかつた?」

「……さて、夕飯の支度でもするか

「あ、ちよつと… 話を変えないでよー。」

啓輔はさつと皿を逸らし、座っていた応接用のソファーから腰を上げた。

冷たい優の視線を受けながら、啓輔は、キッチンのある奥の部屋へと向かって行く。

さて、今日のメニューは何にしようか。

ひつして、夜は更けていく。

## 第十話

翌日、午後四時半過ぎ。優が帰つてくると、啓輔は、菜々の通り青港高校へと車を走らせた。

啓輔はハンドルを操作しながら、これから行つ事を整理する。

まずは、関係者 松浦秀樹と、塙本琴音、そして菱本舞花に対する聞き込んだ。

いきなり車内に誘い込むのも何なので、近くの小洒落た喫茶店にでも入つて事情を聞くのが良いだらう。

……塙本琴美と松浦秀樹の二人はともかく、菜々と敵対関係にある菱本舞花が真面目に話を聞いてくれるかどうかは微妙だが。

そんな父親の心情を察したのか、助手席に座る優が、啓輔にこつと微笑みかける。

「大丈夫だよ。こぞとこつ時は、この優様に任せなさい！ この得意な話術で」

「あーはいはい。そりゃどーも」

「もうー… ちやんと聞いてよねー」

「はいはい」

啓輔は小さく頬を膨らませる優の頭を、左手でぽんぽんと撫でる。

子供扱いするな～やら、片手運転は危ない、なんて声が聞こえてきたが、華麗にスルーする。

その内、路輔に真面田に取り合ひが無い事を察し、優は何も言わなくなる。

小さく苦笑を浮かべ、路輔はようやく左手を離した。

「あ……ねえ、パパ。あれじゃない? 菜々さんの通う学校

「ん? ……ああ。そりみたいだな」

優が遠くに見える、大きな白い建物を指差す。

カーナビを確認すると、確かにそこには、“都立青港高等学校”と刻まれている。

どうやら、目的地は近いようだ。

路輔は、カーナビを見つめたまま、近くに車が停められそうな場所は無いか と思案する。

流石に、校内に停めるのはまずいだらう。

高校付近にコンビニの表示を見つけたので、そこにて駐車する事とする。

距離から推定して、高校から歩いて五分 まあ、丁度良い距離だらう。

まもなく、啓輔はコンビニを見つけた。

青港高校までの道中、買ったばかりの菓子パンを頬張りながら、優が問いかける。

「ねえ、パパ。こざ高校へ行くのは良いんだけど。……いきなり関係者でもないおじさんが潜入して、大丈夫なの？ 大げとになつて、教師とか呼ばれたら面倒だよ」

「おじ……まあ、確かにな」

「じつあるの？ まさかとは思ひナビ、無計画とか？」

「」

啓輔の沈黙を、是と受け取ったようだ。

優が困ったように眉根を寄せた。

「ただでさえ子供連れのおじさんなんて座して満載なのに、その上“ねえ君、よかつたら僕の車に来ない？”……なんて、犯罪者だよ？ もしそんなおじさんがいたら、優だつたら警察呼ぶよ。いやマジで」

「流石に、そんな誘い方をする気はないんだが。まあ、ある程度は考えてあるから安心した」

「……ふーん」

「あ、あれっぽいぞ。青港高校」

冷たい娘の視線をかわし、啓輔は白い校舎を指差す。

車で遠目から見たものより、少し古く見える。

啓輔の記憶が正しければ、確か彼の学生時代には既に名門と言われていた筈だ。

単純計算で、創立十年以上。

学校としては比較的新しい方なのだろうが、校舎が古くなつてしまっているのに、も<sup>うなづ</sup>頷ける。

腕時計を確認すると、五時四十分を指している。

辺りは既に暗くなりかけているが、校舎から漏れる光のお陰で、足元は明るい。

二人は、校門の前で生徒達が出てくるのを待つ事にする。

しばらくそうしていると、やがて、校舎から一人の女子生徒が現れた。

「ねえ、君。ちょっと時間良いかな？」

「……はあ。貴方、一体」

少女は、啓輔に訝しげな瞳を向ける。かなり怪しまれていようだ。

勿論それは当然の反応なのだろうが……少し傷つぐ。

「一年の、松浦秀樹って知ってる？俺の弟なんだけどさ。今日、急用ができたから、迎えに来たんだ。まだ、校内にいる？」

「秀樹に、お兄さんなんていない筈はずですけど」

「長い間海外についてね。久しぶりに戻つて來たんだ。知らないのも無理はないよ」

“秀樹”といつ呼び名から察すること、どうやら彼とは顔見知りのようだ。

家族構成も知っているようなので、ある程度親しい仲なのかもしれない。

まだ怪しんではいるようだが、その説明で一応納得したらいい。

少女は校舎を指差した。

「秀樹なら、もうすぐ来ると思いますよ。部活も終わつたし、今は着替え中だと思います……あ、ほり」

その時、校舎から少年達の集団が見える。

重そうな鞄を背負い、和氣あいあいと話しているのが見て取れた。

「秀樹。あんたにお客さんが来てるわよ。お兄さん、だつて」

「お兄さん？ 僕、一人っ子なんだけど 」

少女が集団に声を掛けると、リーダーらしき一人の少年が振り向く。

成程。確かに、菜々の話通り、なかなか整った顔つきをしていた。しかし、彼女のいう爽やかな笑顔は浮かべておらず、疲れたように弱々しく微笑んでいた。

心なしか、少しやつれている。

やはり、菜々が来ていない事に影響されているのだ と、啓輔は思った。

「こんにちは。……えっと、秀樹ですけど」

「ああ、突然ごめんね。速水菜々さんについて、話があるんだけど。時間、良いかな？」

後半部は、周りに聞こえないように、少し声を響める。

思つた通り、“速水菜々”という単語に、秀樹はピクリと反応した。

「……ちょっと、待つて下さー」

先程とは違う、恐ろしい程冷静な声音で、秀樹は啓輔に囁き返す。

一緒に校門を出てきた少年達に適当に言い訳をした後、彼は戻つてくる。

「お待たせしました。話つて、一体？」

「ハレじゃあ何だから。近くのファミレスこでも」

「……分かりました」

秀樹は、しつかりと頷いた。

## 第十一話

三人が向かったのは、某ファミリーレストランのチエーン店だった。

時間が時間だけに、客は少ない。

ちらほらと学生達の姿も見受けられたが、幸いな事に、秀樹の友人らしき人物はいないようだ。

啓輔は出来るだけ奥の方の席を選び、腰かける。

着席とほぼ同時にやつてきた店員に軽食とソフトドリンクを三つ頼み終えると、啓輔は口を開いた。

「まずは、自己紹介から始めましょうか。私は沢内探偵事務所所長、沢内啓輔と申します。本日は、依頼人である、速水菜々さんの件について、幾つかお尋ねしたい事がありますので、このような場を設けさせて頂きました。隣に座っているのが、娘の優です。秘密は厳守致しますが、席を外させたい時は言って下さい」

「「」丁寧に、どうも……。俺、菜々の彼氏の、松浦秀樹です」

啓輔の正体は、思いもよらないものだつたらしい。秀樹は呆然とした面持ちで彼を見つめている。

緊張をほぐすため、啓輔は小さく微笑を浮かべた。

「そんなに、固くならなくても結構ですよ。ただ、私の質問に幾つ

か答えて下されば、結構です。勿論、答えていく質問には、無理に  
答えて下さらなくとも構いません」

「分かりました。俺なんかの証言で、菜々が少しでも救われるなら  
……」

「「」協力、感謝します」

「あ。でも、その前に一つ、俺から質問しても良いですか？　どう  
しても、確認したい事があるんです」

「何でしょ？」

「　　」一週間の間に、菜々と会われたんですね？　あいつ…  
…元気になりましたか？」

啓輔の意と反し、それは素朴な疑問だった。

しかし、秀樹の浮かべる表情はどこか切実だ。

こんな胡散臭い者の言葉でも、そこに彼女が戻つてくる可能性が  
あるのなら、迷わず信じる、という事だろう。

菜々は、間違いなく想われていた。

「どうでしたか？　俺、何度かあいつの家行ってみたんですけど、  
居留守使われて。あいつと最後に会ったのは、もう一週間くらい前  
なんです」

「　　勿論、元氣でしたよ」

その瞬間啓輔は、隣で優がはっと息を呑んだのを感じた。

事務所に来た時の菜々は、情緒不安定で、お世辞にも元氣と言える状態では無かつた。

しかし、眞実とは時に残酷な物となる。それを知る彼は、敢えて嘘をついた。

啓輔の答えに、秀樹がほっと息をつくのが分かつた。

心なしか、先程よりも落ち着いている。

「有難うございました。俺に答えられる範囲の事なら、何でも聞いて下さい」

「……では、質問に移させて頂きます」

啓輔は、この少年に聞いておきたい事が二つほどあった。

「まず、一つ用意。……松浦さん。貴方は、菱本舞花さんに疑いをかけた菜々さんと口論になり、喧嘩けんかをしたんですよね？」

秀樹がはっと顔を強張らせたのが分かつた。

幾ら何でも、いきなりすぎただろうか……？ と少し反省する。

しかし、彼は少し間を置いた後、小さく頷いた。

「今思えば、あいつ 菜々には、酷い事をしたな、って思つてま

す。……自惚れかもしれないけど、信頼を寄せてくれていた菜々からしてみれば、結構辛かつたと思います。それに気付いて、慌てて謝ろうと思つて、あいつの姿探したんですけど 何処にも、いなくて……」「

それっきり、彼は口をつぐむ。その当時、菜々がいたのは旧校舎の女子トイレだ。

男子の彼が探しあてられなかつたのも、無理はない。

「貴方は、幼馴染の無実を訴えた。ただ、それだけの事をしたままで。貴方に責任はありません」

「……ありがとうございます。そう言って貰えると、少し気分が晴れます」

秀樹は、弱々しく微笑んだ。

やはり、“気にするな”と言われても、そう簡単に受け入れられるものではないらしい。

これは当人達の問題であり、部外者が口出しする事ではない。

啓輔はそれ以上その事には触れず、話を進めた。

「では松浦さん 貴方は、何故そこまで、彼女を信じているのですか？」

「彼女、って、舞花の事ですよね？俺、あいつの幼馴染なんですよ。あいつの事は、小学校の時から知ってるんです」

「ええ。その辺りは、速水さんから伺っています」

「そうですか。……いや、実はこの話には続きがあります 耻ずかしながら、俺、小学生低学年の頃、一時期苛められてたんですよ」

「……ほお」

その情報は初耳だった。照れくさうに頭を搔きながら、秀樹は話を続ける。

「俺、昔は結構弱つちくて、その事をからかわれて、ちょっかい出されてたんですよね。そんな俺を助けてくれたのが、舞花でした」

「

“止めなさいよ、あんた達！ そんな事してて、恥ずかしくないわけ！”

“秀樹君も秀樹君よ！ 男の子でしょ？ なんで言ひ返せないの！”

？”

「後で知ったんですけど、あいつんち、一人兄貴がいるらしくて。結構やんちゃに育つてきたらしいんです。あんまり仲良くなかった俺の事も、何の見返りも持たずに、助けてくれて……だから、

そんなあいつが、ストーカーなんて卑怯な真似……絶対にするわけないんです」

そう告げる彼の瞳は真剣そのもので……とても、嘘をついている  
ようには見えなかつた。

## 第十一話

確かに、秀樹の話を聞く限り、菱本舞花が犯人だとと安直に決めるのは、早すぎる気がする。

……まあ、かといって、彼の話をまるつきり鵜呑みにし、彼女を容疑者候補から外す気はそいつらないのだが。

皆輔は二つの質問を、秀樹に問う。

「それでは最後にもう一つまあこれは、純粋な好奇心が強いのですぐね。お一人は、どこで知り合われたんですか？ 速水さんの話を聞く限り、お一人のクラスは違うらしいですし……失礼ですが、普段の速水さんと松浦さんに、接点があるとは思いにくい」

結構酷い事を言つた気もしたが、秀樹は気にした様子もなく、照れくさそうに微笑んでいた。

「ああ。……これ、ちょっと惱<sup>の<sup>わけ</sup></sup>氣<sup>の<sup>け</sup></sup>話になつちゃうんですけど、良いですか？」

「どうぞ」

「菜々とは、一年の頃、クラスが同じになつたんです。出席番号の関係で、席替えする前の最初の一ヶ月は隣同士で……」

そこで一寸言葉を区切り、秀樹は、どこか遠くを見る様な目をした。

口元には薄らと微笑が滲んでいた。

その頃に一田惣れしたんだな　と、啓輔には何となく思った。

「　ああ、すみません。つい、当時の事を思い出しちゃって。それで、一年になつてクラスは離れちやつたんですけど、文化祭の実行委員会で、一緒になつたんです」

「成程。それで、昔の想いが蘇<sup>よみが</sup>つてきた、と。……随分、素敵なお話ですね」

「す、すみません！　ほんなくだらない事長々と話しちゃつて……」

啓輔がにこやかに微笑んだ瞬間、はつとしたように、秀樹が真つ赤になる。

菜々の聞いていたイメージとの違いに少し戸惑つたが、なかなか面白い少年だと啓輔は思った。

「いえ、聞いたのはこちらですし。こちらも、お時間を取らせてしまい、すみませんでした」

「い、いえ、そんな　」

秀樹は照れ隠しに、頼んだアイスコーヒーに口を付けた。

しばらぐー一人は世間話を交わしていたが、六時半を過ぎた頃、啓輔はわざとらしく時計を見やる。

そして、秀樹に小さく会釈をしながら、申し訳なさそうに告げた。

「こんな時間まではみませんでした。そろそろ、失礼します」

「あ、じゃあ俺も……」

啓輔が立ち上ると同時に、秀樹も立ち上がった。

「え？ パパ、もう行くの？」

届いたばかりのサンドイッチを頬張る優が不満げな声を上げたが、啓輔は無視する。

優は名残惜しげに皿を見つめていたが、二人に置いて行かれるのは嫌なので、渋々立ち上がった。

「お会計、1152円になります」

「えっと、アイス」「コーヒー一杯だから」

レジの前で財布を取り出す秀樹を、啓輔がにこやかな微笑みで制した。

「ああ、結構です。今日は、私の奢りですよ」

「そんな……悪いです」

「話を聞かせて下さったお礼です。気にされなくて結構ですよ」

「本当に大丈夫ですから。俺、お金の事で問題作るの嫌いなんですね」

困ったように微笑みを浮かべ、秀樹は自分の分を店員へ支払う。

彼ら高校生とはいえ、所詮は学生。

手に職を持つ啓輔と比べ、手持ちがそんなに多いわけではないだ  
るや。

最近の若者にしては、随分しつかりしているな　と啓輔は思つ  
た。

……いや、彼自身も充分若者の部類に入るのだが。

結局、秀樹が啓輔に奢られる事は無かつた。

一人が秀樹と別れ、車に戻つても、優の機嫌が悪くなる事は無か  
つた。

食事の邪魔をされたのだから、てっきりまたあの不機嫌そうな顔  
で膨れ出すかと思っていたので、啓輔には少し意外だった。

「優、怒つてないのか？ サンドイッチ、まだ全部食べてなかつた  
のに」

「え？ ……ああ、別に」

シートベルトをしながら、優は淀みなく答える。

確かに、聲音からも怒りは伝わってこない。

「一体どうこう心境の変化だ？」と、啓輔は、訝しげに眉根を寄せた。

「どうしてまた急に？ てっきりお前の事だから、“パパの馬鹿！ サンディイッチの神様に呪われちゃうよ！”なんて言い出しかねないと思って、結構覚悟してたのに」

「……パパ、一体私の事、何だと思つてるの？」

その言葉に、優は少し不機嫌気味に眉根を寄せせる。

“食い物の恨みが尋常じやない魔人”という言葉が喉の奥まで出かかつたが、何とかこらえた。

「パパがあの時間に帰った理由は分かってるもん。秀樹さんの帰りがあまりにも遅くなるのを防いだだけでしょ？ 秀樹さん、何度かちらちら壁の時計見てたし」

確かに、優の言つとおりだ。

世間話をしている間にも、彼はちらちらと不自然に時計のある方を見やつていた。

気遣いの出来る彼の事だ。

「これも菜々のため」と、なかなか別れを切り出せなかつたのだ  
ひとつ。……悪い事をした。

啓輔は小さく苦笑を浮かべた。

「当たり。……よく分かつたな?」

「私だって、いつまでも子供じゃないんだよ? 人間觀察くらい、  
どうつて事ないもん!」

そこで優はえっへんと胸を張る。

いつもと変わらないその動作に啓輔はクスッと微笑んだ。

途端、優が頬を膨らませる。

「な、何よ! また馬鹿にしてるの?」

「してないって。いや、やっぱり変わつてないな、って思った  
だけだよ」

「やっぱり馬鹿にしてるー!」

少しさは成長したかと思ったが、やっぱりまだまだ子供だな  
なんて親心は、優には伝わらなかつたようだ。

啓輔が車を発進させても、優の頬はまだ膨らんだままだった。

## 第十一話

翌日、午後六時過ぎ。一人は再び青港高校の校門前にいた。

何故また同じ場所に足を運んでいるか？ 答えは簡単だ。

昨日話を聞きそびれた、菱本舞花を呼びだす為だった。

しばらく立っていると、やがて校門から見覚えのある少年秀樹が顔を出す。

今日は一人のようだ。周りに昨日一緒にいた友人達はない。

彼はぼーっと歩いていたが、啓輔の存在に気が付くと、少し驚いた様な顔をしながら、近付いて来た。

「沢内探偵？ 今日も何か？」

「ああ。今日は、菱本さんに話を聞こうと思つてね。……彼女は、まだ学校に？」

「はい。マネの仕事があるみたいで……。少し、遅くなるそうです」

“菱本”の名を出した割に、彼はあまり動搖していない。

小さく微笑みながら、校舎の方を指差した。

「といつても、あと少しすれば来ると思いますよ。そんなに長引く仕事じゃない、って言つてたんで あ、ほら、来ました」

秀樹の言葉に校門を見やると、確かにそこからは一人の少女が歩いてきていた。

彼が手招きすると、怪訝けげんそうな表情でこちらに向かってくる。

「舞花、お前に話しがあるんだって」

「話？……って、貴方。昨日の人じゃない」

「昨日？……ああ。貴方が菱本さんだつたんですか」

少女 菱本舞花は、昨日校門前で秀樹を呼んだ張本人だつた。

「成程。探偵さん ね」

納得したような言葉とは裏腹に、舞花の表情は訝いぶかしげだ。

非協力的な態度に、啓輔は苦笑いを浮かべた。

彼等のいる場所は、昨日も訪れたファミレス。現在席に腰かけているのは、啓輔、舞花、優の三人だ。

舞花は秀樹に来てほしかったようだが、彼がいると答えにいくであらう質問を控えていたので、啓輔の方から同席を断つた。

その事も関係しているのか、舞花は先程から不機嫌そうだった。

「すみません。秀樹さんがいると、答えにくいと思つ事が幾つかあつたので、彼には席を外してもらいました」

「……何ですか、それ。私に、そんな変な事を聞くつもりなんか？　人様に聞かせられられないような話をする氣はありません」

舞花は、良く言えば真っすぐ　悪く言えば、頑固がんこだった。

「己じを貫き通す意思是立派だと思つが、今の啓輔けいすけにとっては苟立ちの対象にしかならない。

必死に口角くつを上げながら、啓輔は問いたずらつた。

「では、本題に入ります。菱本さん、速水菜々さんをじこ存知ですか？」

「知つてるわ。秀樹の彼女ひめでしょ？　で？　私と彼女ひめに、一体何の関係かいかいが？」

「单刀直入たんとうちょりゆに聞きますが　菱本さん。貴方あなた、松浦さんに好意を抱いているんじやありませんか？」

「……それは、私が彼に惚ほれている　と、そういう解釈かいしゃくでよろしいのでしょうか？」

「やう考えて下さつて構いません」

「」

啓輔けいすけがそう告げると、舞花は俯ふかむき、黙り込んでしまう。

よく見ると、彼女は肩を震わせていた。

……もしや、自分の心無い言葉で泣かせてしまった？

つい苛立つっていたからといって、彼女の心の傷を抉つてしまつたのではないかと、啓輔は後悔する。

啓輔は珍しく、慌てた声を上げた。

「すみません……」んな、くだらない事聞いてしまつて。……あの、今の質問の事は、忘れて」「

「…………」「…………」

「え？」

啓輔の言葉に、舞花は堪え切れなくなつたかのよつてくべもつた声を出す。

「あつはつはつはつはー！」

彼女は、笑っていた。

「成程、そういう魂胆つてワケ。速水さんの不登校は私のせい私が、彼女に“秀樹と別れなさい！”とでも告げた。だから私は、脅迫罪で停学処分。……つづん、退学処分、かしら？ そして、秀樹と速水さんの二人は、一人仲良く過ごしました。めでたしめでたし そんなシナリオ？」

そこで舞花はふっと真顔になる。

盛大に笑った後なので、それは、少し恐怖すら感じさせた。

「ふざけないでよ。何の根拠があつてそんな事を言えるわけ？私を悪者にして、全ては万事解決？馬鹿馬鹿しい。本当にそんな迷推理言いだしたら、私、一生あんたの事怨み続けるわよ」

「……それを推理して、真相を探るのが私の仕事ですから」

「それは随分、『迷探偵』さんの台詞にふさわしいですわね」

舞花は“迷探偵”の部分を強調する。

彼女のその一言で、場の空気は一気に重たくなった。

## 第十四話

舞花の発した一言で、一同はシン と静まり返る。

最初の方は不敵に微笑んでいた彼女も、あまりにも長い間啓輔が黙っているので、気まずそうに視線を反らした。

少し言いすぎたかしら と言いたげに、舞花は啓輔を見やるが、彼は何も言わない。

結局舞花は話しかけるタイミングを掴めず、黙り込んでしまうのだった。

と、その時 。

「ねえ、お姉さん。それ、見せて?」

「……え?」

突如、舞花の耳に、幼い少女の声が飛び込む。

それまで、啓輔の横で大人しくジュースを飲んでいた少女 優  
だつた。

彼女は不思議そうな瞳で、舞花の鞄に付けられている羽の付いたキー ホルダーを見つめていた。

そして、悪意を感じさせない純真無垢な瞳で微笑みかける。

「「」のキー ホルダー、ビニで買ったの？ すつ「」く 可愛いね

「ああ、それ？ ドリームキャッチャーっていうの。アメリカのキー ホルダー……って、いうよりは、お守りみたいな物かしら？ 悪い夢を、網でからみとつてくれるんですって」

「へー。お姉さん、アメリカなんて行つたんだ。いいなー」

優はやつ言いながら、にこやかに笑う。

彼女の底抜けない明るさに、舞花の心も癒されたらしい。

気が付けば、二人はにこやかに微笑みあつていた。

「優、行つた事ないからよく分からんのだよね……。家族旅行？」

「まあ、そんな所ね。両親があつちに住んでるから。お休みの時、偶に遊びに行くのよ」

「お休み……って、「」の前の三連休？」

「ん。やつよ」

“三連休”といつのは、今から二週間前の事。

金曜日に祝日が被つた為、本来なら土・日の一連休が、金・土・日の三連休となつていたのだ。

「じゃあ、帰つてきたのは日曜日？ 随分急な旅だつたんだね」

「まあな。……といつても、時差ボケとかの影響で、実際に学校に行き始めたのは、その翌々日の火曜日からなんだけど」

「ふーん……」

優がそこまで言つと、啓輔がはつと何かに気付いた様な顔をする。

小さく口角を上げた父を見やり、優はそつと目を細めた。

翌日。少女は、休日だというのに学校に来ていた。

別段、部活動や委員会があるわけではない。

昨夜“速水菜々の件について話がある”と、探偵を名乗る男から電話があつたのだ。

少女にとつて、“速水菜々”は決して赤の他人ではない。

一体何の話なのだろうと思ひながら、学校までの道を歩いていた。

やがて少女は、学校の正門前に着く。

そこには一つの人影があつた。

一人は、電話をした男であつた若い青年。

もう一人は、その男の娘らしき幼い少女だった。

男は、少女を見やると、小さく手を挙げる。

そして、つかつかと少女の元へ歩み寄つていった。

「こんにちは。……いや、“初めまして”の方が正しいのかな?  
塚本琴音さん、ですね?」

「はい、初めまして。……確か、沢内探偵、でしたよね?」

少女 琴音は、小さく微笑んだ。

## 第十四話（後書き）

次回解決（？）編なので、今回は結構短めです（汗）  
出来しだいの予定なので、読んで頂けると幸いです！

## 第十五話

数分後。三人は学校近くの公園に居た。

「ここでは何だから」と、啓輔が誘つたのだ。

場所を選ぶような話なのだろうと察した琴音は、その提案を快く受け入れた。

琴音を真ん中にし、三人がベンチに腰掛けると、啓輔が口を開いた。

「まず塚本さん。貴方に、一つ確認しておきたい事があります。  
速水さんが、ストーカー事件に巻き込まれている事はご存知ですかね？」

「はい。……そのせいで菜々、最近学校来てなくて……」

親友である少女の名を出され、琴音は小さく俯く。

大切な友人が学校に来ていないというのは、中々辛いものだ。

「あの子、昔からこういう事に弱くて……色々考えすぎちゃう分、心のダメージが大きいんだと思います」

「昔? 彼女とは、幼馴染か何かなんですか?」

「中学の時の同級生なんです。同じクラスになつて意氣投合して…  
…。菜々とは、よく気が合つんですね」

「成程。気が合つですか」

「……それが、何か?」

“気が合つ”という部分に、啓輔はやけに過剰に反応する。

言葉自体に、特におかしな部分は無い筈だ。琴音は、彼の反応に首を傾げる。

「いえ。……“気が合つ”ならやはり、好きな人の好みも似ているんでしょうな」

「……私を、疑っているんですか?」

啓輔の言葉で琴音は、彼が何を言わんとしているのか察したようだ。

不快気に眉根を寄せせる。

彼はその質問には答えず、言葉を続けた。

「最初、速水さんの話を聞いた時、幾つか不思議に思つた事があつたんですね」

「聞かせて下せー」

「……いえね。そんなにおかしいといつほどの事でも無いのですが。菜々さんが脅迫状を貰つた翌々日……塚本さん。あなた、朝彼女を迎えて行つたらしいのですが、覚えてますか?」

「はい。確かに、そんな事もありましたね」

「……何故、その日の前日 つまり、脅迫状が届いた翌日に、彼女の家に迎えに行かなかつたのですか？」

「そんなん……個人の自由じゃないですか。あの日は、偶々（たまたま）寝坊しちゃつて……菜々と一緒に行くような余裕、無かつたんです」

「まあ、良いでしょ。それくらいの可能性なら、充分考えられますしね」

勿体ぶつた割には、意外に啓輔はあっさりと引き下がる。

しかし、彼の表情はまだ余裕がある。

これ以外にも、琴音を犯人扱いする理由があるらしい。

「それからもう一つ。その日の毎。松浦さんと速水さんが口論になつた時の事です。勿論、覚えてますよね？」

「ええ」

「あの時、速水さんに“別れれば？”なんて、告げてましたよね？私は、どうしてもそれが貴方の本心にしか思えないんですよ。速水さんは、自分の事を考えて言つてくれた、と<sup>かいしゃく</sup>解釈したよつすけど」

「解釈も何も、私、別に本気で言つたわけじゃ」

「あの場合、貴方が本気でそう思つていたなら、“一人はお似合いなんだから、もつとしゃきっとしなさい”とでも、言つそつなんですかけどね？」

「……それは」「

確かに琴音の性格なら、自分の意見を言つた後きちんとフォローするだろ？。

“別れた方が良い”なんて後ろ向きな意見は、彼女らしくない。

「それに、貴方が犯人なら、様々な疑問が解決します。例えば、無言電話にしても、友人である貴方なら、電話番号を知つているのも領けます。非通知設定なんて、今の時代、簡単に出来ますしね」

「そ、そんなの、ただ単に帳尻を合わせていいだけじゃない！別に、私じゃなくても誰にだって出来るわよ！あの“別れるメール”的だって、今時アドレスくらいすぐに手に入るでしょー？」

「……別れるメール、ですか」

そこで、啓輔はすつと静かな聲音になる。

琴音は彼の態度を不審に思い、何か失言をしてしまったのか！？と、焦る。

今までの発言におかしな所など無かつた筈だ。……一体、何故彼は急に？

彼女の疑問は、啓輔の一言によつてすぐに解決する事となる。

「塚本さん 何故、その事を”存じなのですか？」

「え？ ……あ」

「彼女はそれ以来学校に来てはいない筈のですが……一体、どこでその情報を？」

「そ、それは……そ、そうよー。あの日、菜々からメールが来て……。それで、知ったんです」

「……ほう。成程」

琴音は、明らかに動搖していた。

これでは、自分で“私が犯人です”と言つて居るようなものだ。

もつ一息で、彼女は全てを認めるだろうと、啓輔は判断した。

「そ、そうよ……犯人はあの女 菱本さんよ。そこに決まってるわー！」

「……その、根拠は？」

「根拠なんてあるわけないでしょ？ 状況的証拠だけで充分よ！ あの子がやつたに決まってるわー！」

かなり錯乱さくらんしているようだ。

「うわ」とのよにぶつぶつと“そりよ……彼女が犯人に決まっている”などと繰り返している。

これこそが啓輔の最大の狙いだつた。

「 彼女に犯行は不可能ですよ。脅迫状が届く前々日まで、彼女はアメリカにいたんですから」

「な、何よ。前々日でしょ？ 帰つて来た翌日は休むとしても、充分脅迫状は書けるし、下駄箱にいれておく事だつて 」

「無理ですね。そもそも、脅迫状なんてものを書きようがない」

「……それ、どういう意味ですか？」

「お忘れですか？……一人が付き合いを始めたのは、脅迫状の届く前日 つまり、脅迫状を書くためには、一人が付き合い始めた、その日にその事を知つていなくてはいけないんですよ」

「あ……」

そこまで言われ、ようやく彼女は取り返しのつかない失言をしてしまった事に気が付く。

しばらく田を見開いた後、小さく頃垂れた。

「 最初のきっかけは、ほんの些細な事ささいごだったんですね」

琴音はそう言ひと瞳を伏せ 一年前の春に、想いを馳せた。

## 第十五話（後書き）

次回、犯人の独白（？）編突入ですw

きっともうすぐ完結のはず……です。多分。

長くてもう3話で終わればいいな……と思つてあります^—^；

ここまでお付き合ってくださり、ありがとうございました

最後までお付き合いいただけた嬉しいです

## 第十六話

一年前、春。

“ねえ、知ってる？ 三組の松浦秀樹君”

“知ってる知ってる！ まだ入ったばかりなのに、もうレギュラ－入りしたんでしょう？”

“イケメンで運動神経抜群。おまけに頭も性格もいいなんて、まるで王子様だよね～”

琴美が、彼“松浦秀樹”の噂を聞いたのは、入学してすぐの休み時間。

大して仲良くもない女子グループの女子達の話だったので、詳しく述べ覚えていないが、一目見てみたいな なんて野次馬根性を持つたのはよく覚えている。

その日の昼休み。琴音は一年三組を訪れた。

別段、噂の彼を見に行つたわけではない。

ただ単に、親友をお弁当に誘いにいつただけだ。

彼女 速水菜々もまた、一年三組に所属する者の一人なのだ。

琴音は周りを見回し、親友の姿を探す。

菜々は いた。隣の席に座る少年と、楽しげに談笑している。

少年の姿は、窓から差し込む光の関係で、シルエットしか見えない。

果たして声を掛けているものなのか と軽く悩むが、彼女が声を掛ける前に、菜々が琴音に気が付いた。

「あ、ことひやんー 迎えに来てくれたの?」

「まあね。お昼行こ?」

「うん、ちょっと待つて。……ゴメンね、松浦君。」この話の続きは、また後で

「ああ。後でな」

“松浦君”と呼ばれた少年は、小さく手を上げ、菜々の言葉に応える。

その時ふと、先程の少女達の会話が頭を過った。

“ねえ、知ってる? 三組の松浦秀樹君”

ちょっとした好奇心で、琴音は問いかけてみる。

「ねえ菜々。もしかして彼って……松浦、秀樹君?」

「……君、何で俺の名前知つてんの？」

琴音の言葉に、“松浦君”は瞬時に反応する。びしやり、当たりのようだ。

菜々も、不思議そうな顔で琴音を見つめていた。

「さつき、うちのクラスで話題になつてたの。イケメンで運動神経抜群。おまけに頭も性格もいいなんて、まるで王子様みたいだつて」

「王子様なんて……そんな、大層なもんじゃないよ」

少年は困つたように小首を傾げた。

その時、カーテンが閉じられ　　彼の顔が、見えた。

苦笑を浮かべる彼の顔立ちはかなり整つている。

琴音はあまりジャニーズなどには詳しくないのだが、そういうたぐるープの一人だと紹介を受けても、全く驚かない。

体つきは華奢かわしゃだが、決してガリガリという訳ではない。

必要最低限の筋肉が程良くなき、健康的なスポーツマン、といふ

感じだ。

これで本当に頭も性格も良いといつなのなら、確かに、まるで何処かの国の王子様のようだ。

爽やかな笑みを浮かべる彼に、いつしか彼女の目は釘付けになつており……動悸<sup>じうき</sup>が高まるのを感じる。

ああ……これが、一日惚れなんだ と、琴音は思った。

その時、彼女は氣付かなかつた。

彼が自分ではなく、親友に熱い視線を注いでいた事に。

「」の口をキッカケに、全ての歯車は、少しずつ狂いだしていく。

「」とちやん。私、松浦君の事……好きかもしれない

頬を赤く染めた彼女からそう告げられたのは、それから約一ヶ月ほど経つた後の昼休みの事だった。

「 そう、なんだ」

しばしの沈黙の後、琴音が口にしたのは、酷く乾いた言葉だった。

口角<sup>じゅうかく</sup>を上げるのが辛い。

幸いな事に、困ったような愛想笑いの意味は菜々に気付かれてい

ないようだった。

不自然な親友の態度に気付かないまま、菜々は話を続けていく。

「最初の頃は、ただ格好良いだけで、付き合いにくらい人なのかな……なんて思つてたんだけどね、お話ししていくうちに、本当は良い人なんだ、って気付いていつて……」

そこまで話終えると、菜々は照れたように瞳を伏せる。

菜々の事は中学の頃から知つているが、彼女のこんな微笑みを見たのは初めてだった。

……応援しよう。

琴音はそう心に決めた。

じうせ叶いもしない自分の恋慕の情で大切な親友を失うより、自分の恋心を押し殺して、友情を守り抜いた方が良いに決まつていてる。

そう思つた琴音は、必死に口角を上げ、菜々に微笑みかけた。

「……菜々、私応援するから。頑張つてね」

「ありがと。ことひやんなら、そつ言つてくれるつて信じた」

無邪気な笑顔を浮かべる彼女を見るのが、辛かつた。

しかしその決意は、彼女が思つ以上に、あまりにも厳しいものだつた。

昼休み。琴音が菜々を迎えて行くたびに見せつけられる、仲睦まじい親友と想い人の姿。

毎日のように聞かされる、想い人との惱氣話<sup>のうけ</sup>……。

駄目。応援するつて決めたのは、私じゃない。<sup>ともなつ</sup> そう思いながら菜々に接し続けるのは、酷く精神的苦痛を伴つた。

そんな日々を繰り返していく内に……いつしか琴音の心に黒い感情が芽生えていったのは、当然の事なのかもしない。

## 第十七話

それから約一年後の始業式。三人には転機が訪れる。

秀樹と菜々のクラスが離れたのだ。

多くの生徒が通う高校。只単に運が無かつただけのか。それとも、普通の男女より仲の良い一人を疑つた、先生達の策略なのだろうか？

真相は、闇の中だ。

玄関付近にでかでかと貼られているクラス発表の紙を見て、菜々は残念そうな声を上げる。

仲の良い菜々と琴音の二人は、朝校門で合流した後、真っ先にここのへと向かつて来たのだ。

流石に早い時間だつたこともあり、辺りに人は少ない。

紙を見て自分の名前を探しあてると、菜々は溜息をついた。

菜々のクラスは、二年一組。琴音は三組、秀樹は一組……と、三人は見事に分かれていた。

「残念だね、ことちゃん」

「うん。松浦君とも離れちゃうし、寂しいでしょ？」

「……ちょっと、ね」

少し間を開けて、菜々は答える。その声の調子は、いつものそれより低い。

どこか寂しげな笑みを浮かべる彼女を見て、喜んでしまつ自分が嫌で、琴音は無意識に強く握り<sup>いぶす</sup>拳を作った。

「来年こそ、三人で一緒になるといいね！」

「うん。だよね」

口から出る言葉は、驚くほど無機質な物で……琴音は、菜々に自分の感情が読み取られまいと不安で仕方が無かつた。

それから数ヶ月後。夏休みに入る少し前に、学校全体は揉める事になる。

各クラス一石<sup>も</sup>ずつの、文化祭の実行委員決定 活動は、夏休みも返上して行われる為、余程行事に力を込めている人物でない限り避けられる役割だ。

そういう場合は、大抵気の弱い者 菜々のような存在が、<sup>ターゲット</sup>標的となる。

“先生！ 実行委員は、速水さんが良いと思います！”

クラスの中心格の少女の一言により、自分が文化祭実行委員に選ばれてしまったと菜々は言った。

本当はやりたくないのだが。彼女は、困ったような笑みを浮かべていた。

「でも、折角選んでもらったんだし……頑張らなくちゃね」

その頃、秀樹と菜々はクラスも離れ、軽く疎遠状態になっていた。

それと同時に、彼女に対する黒い思いも段々と薄れていた琴音は、昔から不器用な親友を放つておく事が出来なかつた。

実行委員は琴音のクラスでもなかなか決まらず、揉めていた事だ。

夏休みの雑務と親友の苦しみを天秤にかけ 琴音は、前者を選ぶ。

「菜々だけじゃ頼りないよ。しょうが無いな……私も実行委員入つたげる！」

「本当？ ありがと」とちやん！

琴音の言葉を聞き、菜々は天使のよつな笑顔を浮かべる。

そんな彼女の笑顔を見て、琴音もまた幸せな気持ちになるのだった。

この決断は、後に大きな影響を及ぼす事になる もよ。

それは、本当に偶然だった。

各クラスの実行委員が決まり、初めての集まりの日。

一人は、あらかじめ指定されていた教室に入った。

集合時刻が近いだけあって、そこには既に殆どの人が集まつてお  
り、各自雑談を交わしていた。もう少し早く来るべきだったか  
と軽く後悔する。

琴音はきょろきょろと辺りを見回してみるが、委員長らしき姿は  
見受けられない。まだ来ていならしかった。

……と、その時。琴音は、視界に見知った姿を捕らえる。

あれって、もしかして。

「……ねえ、ことちやん。あれって、松浦君だよね？」

菜々が琴音に囁く。どうやら、彼女も気付いたらしく。

その声は、驚きと喜びが入り混じったものだった。

彼の顔を見て、微笑みを浮かべる菜々を見つめながら、琴音の心  
には、再びざわざわとした物が湧きあがっていた。

そんな時、秀樹の視線がこちらを捕らえる。

二人 主に、菜々を見つめると、小犬のような人懐っこい笑みを浮かべ、こちらへと近づいて来た。

「速水と塚本じゃん！ 一人も実行委員？ 偶然だな！」

「うん、 そうなの！ 久しぶり！」

「偶然だね。 宜しく」

秀樹とは出来る限り関わらないようにしよう、といつ琴音の決意は、彼の一言であっけなく裏切られる事となる。

その時、乱暴に引き戸を開ける音とともに、教室に一人の少年が入ってきた。

雰囲気から察するに先輩 それも、実行委員長らしかった。

彼は教卓の前に立ち、男特有の低い声で教室中に呼び掛ける。

「実行委員。学年ごとに分かれて、席に着け！ 三年が窓側。二年が真ん中。一年は廊下側だ」

彼の言葉で、それまでざわついていた教室内がシンと静まりかえる。まさに鶴の一声だ。

「……一年の席、あっちみたい。行こうぜ」

秀樹の囁き声で、三人は真ん中の席へと移動した。

委員長の話によると、仕事は学年<sup>い</sup>と<sup>と</sup>執り行われるらしい。

それで学年<sup>い</sup>とに分かれたのか と、琴音は納得する。

一年生は全部で四クラスある。つまり、計四名の委員<sup>がい</sup>んといふ事だ。

琴音と菜々と秀樹以外のもつ一人の委員は、気の弱そうな男子だった。

名前は確か 白川登<sup>しらかわのぼる</sup>

去年同じクラスだつた筈だが、影の薄いタイプで、あまり関わった事はない。

恐らく、菜々と回<sup>まわ</sup>じよつに、クラスの中心格の者に押し付けられたのだろう。

「一年生には主に教室、及び西校舎のH<sup>ア</sup>リアを担当してもらつ。大まかな仕事は、先程説明した通りだ。詳細は、その都度連絡する」

実行委員に説明を受け、取りあえず今日は解散となる。

「これからまた二人の仲良さ氣な様子を見なければいけないのかと思つと、琴音は気が重くてしおうがなかつた……。

しかし、琴音の受難<sup>じゅなん</sup>の夏休みは幕を開ける 。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4081z/>

沢内探偵事件録 女子高生ストーカー事件

2012年1月5日22時52分発行